

ドラマCD「こくはく〜プロローグ〜」

最終稿

脚本 田村大輔

修正 戀塚誠

【登場人物】

僕 高橋伸也

古乃宮 遥 能登麻美子

(このみや はるか)

倉沢陽菜(瑠奈の妹) 辻あゆみ

(くらさわ ひな)

速水 楓 堀江由衣

(はやみ かえで)

倉沢瑠奈 平野綾

(くらさわ るな)

楓の母 近野真昼

少年時代の僕 木村はるか

少女時代の楓 (堀江由衣)

発車案内女性の声 (木村はるか)

(スーパードビュー踊り子号の

発車を案内するホームの機械音声)

駅員男 近藤隆幸

(スーパードビュー踊り子号の

発車を案内する駅員)

店員女 (木村はるか)

(東京駅でお土産を

売っている店員)

【オープニング】

□地下鉄駅構内（夏・昼）

SE／駅の雑踏

瑠奈「ええつと……東口はどっちだっけ？ ねえ——つて、ちよつと待ちなさいよ！ 自分ばかりさつさと行くなんて、あんたには優しいさつてもものがないの？ ちゃんと案内しなさいよバカッ！！」

□タイトルコール

僕「ドラマCD」

瑠奈・陽菜・遥・楓「こくはくろプロlogue」

【瑠奈パート】

□地下鉄駅構内（夏・昼）

SE／駅地下通路の雑踏

僕「恥ずかしいなあ……あんな大声でさあ」

瑠奈「うるさいつ、あ、謝ったでしょ！ そんなことよりも大事な話があるのよ」

僕「なんだ？」

瑠奈「あんた伊豆旅行に一緒に行くことになったから」

僕「……ん？ それ、おまえが話してた、古乃宮さんの別荘の——」

瑠奈「そうよ、その別荘よ、遥のご両親が持つ」

僕「いきなりそんな話……出発明日じゃないか。冗談だろ？」

瑠奈「文句なんかあるわけないわよね？」

僕「文句って言うか……ホントなのか？ その旅行は女子ばかりで行くんだって、おまえ言うてたじゃないか」

瑠奈「状況が変わったのよ」

僕「男子は他に誰が行くんか？」

瑠奈「アンタだけ」

僕「なんだそりゃ。どういうことだよ」

瑠奈「そうそう忘れないうちに伝えておくわね。
アンタの交通費はお小遣いから分割で返して
もらうって、おば様が言ってたわ」

僕「母さん知ってるのか!？」

瑠奈「ええもちろん。お許し頂くのは当然でしょ?
こき使っていていいって言われてる」

僕「おまえなあ……そういうことはまず本人に言
うのが筋だろう? 小遣いから分割って冗談
じゃないよ」

瑠奈「切符はもう買ってあるから」

僕「え? あの時既に……」

瑠奈「そういうこと。物は私が明日まで預かって
るから」

僕「瑠奈、あのなあ……」

瑠奈「名前で呼ばないでよね」

僕「(諦めのため息) はあ……」

瑠奈「ほら、早く来なさい」

□駅前地上(夏・昼)

SE / 駅前の雑踏(自動車走行音やセミの声
など)

僕「それで? 何がどうなってるのか、きちんと
説明しろよ。どうせ、ただ連れてくってわけじ
やないんだろ?」

瑠奈「あら、察しがいいわね。あんたの仕事は荷
物持ちと荷物番と……」

僕「荷物番?」

瑠奈「そうよ。海岸まで荷物を持っていったら、当然荷物番が必要でしょ？　それがあんたの仕事」

僕「おいおい、その理由はさすがに予想外だったぞ。そんなの自分達でやれよ。今更何言ってるんだ、最初からわかってただろ？」

瑠奈「この間気付いたんだから仕方ないでしょ。どうしようかってみんなが言うから、私が親切にもあんたを推薦してやったのよ。人畜無害度ならクラスでは随一、そういう仕事は喜んで引き受ける奴がいるってね。そしてみんなはそれを信用したわけ。嬉しいでしょう」

僕「おまえそれ絶対バカにしてるだろ。喜んで引き受けるわけないだろ」

瑠奈「信用裏切る気？　まさか変な気でも起こすつもりあるの」

僕「変な気ってなんだよ？」

瑠奈「そ、それは……しらないわよ！　そう、ね……た、例えば、私たちの水着姿を見てニヤニヤするとか……」

僕「そんな顔してないだろ！」

瑠奈「あ、まさかもう既に私の水着姿想像して——」

僕「ああ、全然それは無い。絶対無い！　断じて無い！」

SE／殴る

僕「いてっ！　何するんだよ！」

瑠奈「しるか！　とにかくもうすぐ遙も来るしイヤらしい顔はしないでね。遙は、男子に免疫ないんだから、そういうのは困るのよ」

僕「え？　今日、古乃宮さんも来るの？」

瑠奈「何よ、嬉しそうに……バツカじゃないの」

僕「あ、おいつ、待てよ！　だからあ、そんな顔してないだろ？」

□全

瑠奈「遙、お待たせ」

遙「あ……くーちゃん……（「僕」の姿を認めて緊張）っ！」

僕「こんにちは、古乃宮さん」

遙「えっ！ あ、は、はい、こ、こんにちは……」

瑠奈「さあ遙、今日は買い物がんばろうね」

遙「そ、そうだね。で、でもどうして……」

瑠奈「ん？ コイツ？ 荷物持ち。今日は死ぬ気で頑張ってもらおうわ。だって、荷物持ちの仕事が少ないのは逆に可哀想なもの。（「僕」に向かって）ねえ？」

遙「で、でも……」

僕「いいよいいよ。もう覚悟決めてるから。古乃宮さんも全部預けてくれていいからね」

遙「え……わ、私の荷物なんかいいですよお！」

僕「気にしない気にしない。あ、あと、明日からの旅行、お邪魔かもしれないけど、よろしくね」

遙「お、お邪魔だなんて！ こ、こちこそ、よろしくお願いしますっ！」

瑠奈「遙あ、そいつにそんな畏まった挨拶なんて要らない要らない。それよりあの信号渡りたいわね……ちよっと急ぎましよう」

遙「え？ あ、う、うん！」

僕「（つぶやき）はあ……やれやれ。今日は一日振り回されそうだなあ……」

瑠奈「ほら、早く来なさいよ、荷物持ち！」

僕「はいはい……」



【楓パート】

□ 楓の部屋（昼）

楓がひとりです室の片付け。
引越準備。

SE／セミの鳴き声など

SE／ダンボールの箱を閉じ、ガムテープで

止めるなど

楓「ふう……これで終わりつと。あとは手荷物も
って引越すだけ。いよいよ明日かあ」

楓の母「楓、調子はどう？」

楓「あ、お母さん。うん、こっちはもう終わった。
早かったわ。だつてもう無理に捨てなくていい
んだもんね。こんなに気持ちの明るい引越し
は今までで初めてよ」

楓の母「そうねえ長かったわあ……楓にもいっぱ
い苦労かけちゃったわね」

楓「やめてよ改まって。ごめん、変な事言っちゃ
ったね。苦労したのはお父さんとお母さんでし
よ。私は——」

楓の母「違うでしょ。みんなで頑張ったのよ。家
族みんなだ」

楓「あ……うん、そうね。みんなで頑張った。で
もね、やっぱりお父さんは凄と思う。自分の
家を持つて心決めて、転勤を繰り返して
頑張つて、もちろんそれを支えていたお母さん
もね」

楓の母「あらあら、どうしちゃったんだか。何か
欲しいものもあるのかしら？」

楓「うふふ……やだなあ本心だつてば」

楓の母「でも、楓もよかったわね。夢がかなった
……のかな？」

楓「え……？ なんのこと？」

楓の母「あら、お母さんにもとぼけちゃうの
く？ 引越した先には誰がいるのかな
く？」

楓「……ッ？ ちよっ……あ、あの人のことは今
は関係ない——た、確かに同じ街に住むってい
うのは凄い偶然だけ——」

楓の母「うくん、青春よね。お母さんの若い頃
を思い出しちゃう」

楓「んもう、だから……」

SE／家庭用電話のコール

楓の母「ああ、はいはい……」

SE／走り去るスリッパの音（母親）

楓「んもう！（ぶつぶつ）まったく……普段二
ブいくせに……。でも……本当はこのぐらいで
照れてる場合じゃない。そうよ、私はこの偶然
を心の底から嬉しいと思ってる」

（少しの間）

楓「こういうの、おかしいのかな。ずっと……気
持ちが変わらないなんて。でも、そうなんだか
ら仕方ないよね。転校する度に私は……彼のこ
とを考えてた。最後に会ったのは小学校5年生
の林間学校。それから彼がどんなふう to 成長し
たのか、どんな人になったのかななんて知りもし
ないのに。冷静に考えれば、私は私の中の彼の
幻影を追いかけているだけなのかもしれない。
でも、その想いを取り去ってしまったら、私が
私でなくなるような気がして……それほど彼
の存在は大きい」

SE／椅子に腰掛けるなど

□回想・小学校5年生の林間学校

少年時代の僕「(ひそひそ) お、おい楓。どうして楓がここにいるんだ！？それに女子がこんなところまで来たらだめなんだぞ。学校も違うし、先生に見つかったら怒られるぞ」

少女時代の楓「(ひそひそ) これっ！」

少年時代の僕「(ひそひそ) えっ——」

□回想から復帰

楓「うふふ……あの林間学校は驚いたなあ。偶然施設を使っていた別の小学校に彼がいたのよね。私は先生の隙を見て住所を書き殴ったメモを渡すだけで精一杯だった。本当は話をしたかった。彼の住所も知りたかった。でも無理だった……随分落ち込んだけど、何日か経って手紙が来たときは……嬉しかったなあ。本当に嬉しかった。あの時の気持ちを忘れられない。男の子がわざわざ手紙を書いてくれるなんて、奇跡に近いと思う。私は思いを馳せるだけで何もしていない。できなかった理由はいっぱいある。でもこうして振り返ってみれば、想いの強さは裏腹に疑問だらけ、矛盾だらけ。自分でそう思ってしまったらもう正当化できない。自分を誤魔化すことに意味なんてないから。だから今度こそ。このチャンスは絶対手放さない」

SE／窓を開ける

SE／セミの音が強くなる

楓「腕を上げて遠くを指さしながら）ちようどこっちの方……。その街のどこかに……。いる。いるわよね？」

楓「（遠くを見ながら、「彼」に語りかける楓）あのね、あの時にもらった手紙は、何度目かの引越しの時、そのほかの大切なものと一緒に間違って捨てられてしまったの。だからあなたの住所はちゃんと憶えていない。でも諦めるつもりはないわ。絶対に……。会いに行くから」

楓の母「楓く〜運送屋さん来たわよ〜」

楓「は〜い！」

楓「（自分に向けて改めて決心）そうよ……。お母さんにちょっとからかわれたぐらいで慌ててどうするの。恥ずかしがっている場合じゃない。私は心に決めた、今度会えたらこの気持ちを伝えるんだって。私にここまでの想いを抱かせてくれた彼に、素直な思いを伝える。……。その結果、泣くのか笑うのか、それは神様にしか分からないことだろうけど」

楓「（再び遠くを見やり「彼」に語りかける楓）私があなたの前に現れたら、少しでも時間をください。私の想いを……。聞いてください。そしてできることなら——」

SE／新幹線の警笛（プア〜〜ン）

SE／新幹線走行音



【陽菜パート】

□陽菜の家

瑠奈がリビングで作業中。

陽菜「(元気に)ただいま〜!!」

SE / ドタバタ走ってくる

SE / リビングドアを開ける

陽菜「うは〜! 涼し〜!!」

瑠奈「(作業中の手を止めて)ドタバタ走るな!
なに? 今日は遅かったね」

陽菜「まーねー。帰りに友達と遊んできた。その
ぐらいしなきゃやってらんないっ!!」

瑠奈「ふうん……あと何日あるんだっけ?」

陽菜「一週間。ところでさー、何やってんの?」

瑠奈「(作業しながら)荷物の最終確認」

陽菜「あ、そっか……旅行かあ。いつだっけ?」

瑠奈「(作業しながら)明日から」

陽菜「陽菜、明日は休み! 中休み!」

瑠奈「(作業しながら)あ、そう。じゃあ避暑に
旅立つ私たちを見送りに来る? 入場券代ぐ
らいは出してあげてもいいわよ」

陽菜「べーっだ! 嫌味。なんだよ、海なんか
行ったって、どうせお姉ちゃん泳げないくせ
に! カナヅチ〜!」

瑠奈「(手を止めて)何よいきなり失礼な。それ
は去年克服した。息継ぎさえしなければクロー
ルだってできるわよ。それに大体海でそこまで
泳いだりなんかしない」

陽菜「あ、じゃあ、日焼けだ、こんがりだ! う
わー、もう年なんだから、お肌には気を遣った
方がいいのに……」

瑠奈「はあ？ 何なのさつきから。わっかりやすいガキっぷりねえ。そんなこと言ったって現実は何も変わらないの！ もういいからさつきと着替えてきなさいよ」

陽菜「(ふてくされて) むぐぐ……これもーらいっ！」

瑠奈「こらあ、陽菜！ いい加減にしなさいっ！」

陽菜「へへーん……あれ？ この袋、お兄ちゃんの名前が書いてある。…これ切符だ……」

瑠奈「そうよ、あいつも荷物持ちで行くの。ほら、いいから返しなさい！」

陽菜「ちよつと！ お兄ちゃんが行くなんて聞いてないよ！？ なんで！？ 女の子の友達同士で行くって言ってたじゃん！」

瑠奈「べ、別に言う必要ないでしょ？ 荷物持ちで男手が必要になったのよ。私もどうかと思っただけだし、そういうことなら……一番、害なさそうでしょ」

陽菜「ずるい！」

瑠奈「何が？」

陽菜「ずるいずるいずるいっつっ！！ なんだよそれー！ だったら陽菜も連れてってよ！ 明日は休みだし！ 荷物持ちでもいいよっ！」

瑠奈「明日だけ休みでもしょうがないでしょ？ ひとりで寂しく帰ってくる気？」

陽菜「うぐっ！」

瑠奈「いい？ 前に私は連れて行ってあげてもいいって言った。それを補習でふいにしたのは自分だっけこと忘れてもらっちゃ困るわ」

陽菜「うぐぐぐ！！」

瑠奈「まったく、テストの前ぐらいちよつとは勉強しておけばこんなことにはならなかったのに。忠告もしてやったのにさ」

陽菜「あーん！」

瑠奈「後悔先に立たず。自業自得。これに懲りたら少しは勉強しなさいよ？」

陽菜「いくら懲りたって、勉強したって、もう行かないじゃん！」

瑠奈「まあそうね。来年こんな幸運が訪れることを今から祈れば？ 多分無いと思うけど」

陽菜「ちくしょう！ 青春のバカヤロー！！」

瑠奈「はあ？」

SE／走り去る

□全

二階 陽菜の部屋

SE／陽菜の自室のドアが強く開閉

SE／その辺に荷物を放る

陽菜「なんだよなんだよなんだよー！ 陽菜のことのけ者にして！ そりゃあ自業自得だけど、言い方ってもんがあるじゃないのさっ！」

SE／ぬいぐるみをボスボスボスつと3回

殴る

陽菜「ていていていッ！ とりゃー！」

SE／殴ったものを投げて壁にぶつかる

陽菜「はあはあはあ……あああつ！ ポコ太ごめくん！ いま助けるよー！」

SE／駆け寄る

陽菜「はあ……。いいなあ、お姉ちゃん。お兄ちゃんと一緒に旅行に行けて。お姉ちゃんはきつと、お兄ちゃんのこと本当に荷物持ちぐらいしか思っていないだろうけど。だから、なおさらずるいと思うんだよ。わかる？ ポコ太ア。陽菜だったらそんなことしないよ？ 最初からお兄ちゃんと一緒に遊びたいって言って、一緒に行こうって誘うよ。お兄ちゃんだってその方がいいに決まってるんだよ。それなのに、そういう優しい陽菜はお兄ちゃんを誘うどころか、講習三昧なんだよ。その間にお兄ちゃんはお姉ちゃんにこき使われてき。神様はおかしいね？ そう思うでしょ？」

瑠奈「何好き勝手言ってるんだか……」

陽菜「あ、お、お姉ちゃん……聞いてた！？」

瑠奈「『そういう優しい陽菜』のあたりからね。まったく、神様はおかしいとかさ、勝手なこと言ってる」

陽菜「ふんだ」

瑠奈「着替えたら下に来なさい。アイス、買ってきてあるから」

陽菜「え……ほんとっ!？」

瑠奈「私とあいつからの差し入れ。何個かあるから、食べ過ぎるんじゃないわよ？」

陽菜「やった！ お兄ちゃんもお姉ちゃんもわかっている！ ダイスキッ！」

SE／走って部屋を出て行く。階段を駆け下

りる。

瑠奈「先に着替えろって言ってんの！ ったく……ほんと単純。あいつが言った通り」

□回想・夏の昼の住宅地

瑠奈「あー、帰ったら陽菜の奴、ブチブチ文句言
うんだろうなあ」

僕「アイス何個か買って行ってやればそれでいい
んじゃないか？」

瑠奈「それで機嫌とれるんなら、安いものだけど
ね……」

□回想から復帰・リビング

陽菜「ん〜〜！ 冷た〜〜い！ おいし〜〜！！」

SE／ちゃんちゃん、的なジングル



【遥パート】

□東京駅構内

伊豆旅行に出発当日・午前中

SE／心音ループ

遥（M）「このエスカレーターを昇れば、待ち合
わせの場所。時間は……微妙。私が一番早い、
ということはないと思う。くーちゃんは待ち合
わせの時、いつも10分前に来る。今日もきつ
とそうだろう。多少早いことはあっても、遅れ
ることはないと思う。今は7分前。こんな時、
待つ側になるのは耐えられそうにない。だって
くーちゃんがいると言うことは……。昨日は心
臓が止まるかと思った。あんなの2日続けてな
んて、無理」

□全

東京駅内の待ち合わせ場所

瑠奈「あ、遥が来たわ……。どうしたのかしら？」

僕「何だか歩き方がぎこちないな」

陽菜「具合でも悪いのかな」

瑠奈「おはよう遥、どうしたの？ どこか具合悪
いの？」

遥「お、お、おはよう……。べ、別に具合は悪くな
いよ？」

僕「古乃宮さん、おはよう」

遥「おおおはよう、ございます」

陽菜「古乃宮先輩、おはようございませーす！ え
へへ……見送りでついて来ちゃいましたっ！」

遥「そ、そっか……。あ、ありがとうね、陽菜ちゃ
ん」

僕「本当に大丈夫？」

遥「はいっ！ だいたい大丈夫です！」

遥(M) 「ああ……私、きつとおかしな子だつて思われてる。昨日だつて、ううん、初めて会った時から、こんなのばかり。女の子同士だと大丈夫なのに、男の人の前では凄く緊張してしまふ。特に——」

僕 「昨日の調子でいこうよ」

遥 「は、はいっ！」

遥(M) 「——この人の前では」

瑠奈 「そうねえ、これじゃ昨日の最初より酷いわ。こいつは何も取って食べたりしないわよ。人畜無害なのは昨日のでわかったでしょ？」

遥 「う、うん」

僕 「あんな瑠……倉沢、そういう言い回しはどうかと思う」

遥(M) 「くーちゃんのこと、きつと普段は名前です呼んでいるんだと思う。私たちの前では名字だけ。そういう関係……少し、ううん、凄く憧れる。幼なじみだから当然かもしれないけど、親しくて、ちよつとした秘密があるみたいで、何だか気持ちを通じ合っているみたい……羨ましい。でも、私には高望み過ぎて、全然叶う気がしない。普通に話することもままならないのに、自分から壁を作ってしまうようなことをしているのに、通じ合いたいなんて呆れてしまふ」

陽菜 「あ、向こうで手を振ってる人がいるよ？」

瑠奈 「ああ、来た来た。さすがに遅刻はしなかったみたいね。栄子く〜！。望く〜！こっちく〜」

(向かいに行きながら呼びかける)

遥(M) 「でも……それでも、私だつて頑張りたい。こんな偶然はもう絶対にならないから。この旅行の間、ずっと一緒にいられるなんて、夢みたいだと思った。よくよく考えてみたら、水着姿とか、パジャマ姿とか、もしかしたら寝ぼけてる姿とか、恥ずかしいところをいっぱい見られるかもしれない、それは……やっぱり恥ずかしいけど。でも、でも、でも——」

僕「陽菜、ちょっとシャッター押してくれよ」

陽菜「あ、うん。古乃宮センパイ！撮りますよ〜！」

僕「古乃宮さん、ほら、カメラ」

遥「へっ？ え？ あ……え、えっと……」

陽菜「先輩、顔引きつってますよ。笑って笑って、ニコ〜！」

遥「あう……はう……」

SE / デジカメシャッター音

(栄子と望を連れて戻ってくる)

陽菜「振り返って他のメンバーのところに行く！先輩達も撮りますよ〜！」

遥(M)「写真撮っちゃった……写真撮っちゃった……ふたりに写真撮っちゃった……。私、変な顔してたよね？笑おうと思ったのに顔が引きつって全然笑えなかった。うう……どうしよう。せっかくの記念なのに……」

瑠奈「あーあ、遥はこれで、一生の汚点を残してしまったのね」

遥「え……な、なに？」

瑠奈「こんな奴とツーショットしてしまったことよ」

僕「おまえなあ……」

遥「そ、そんなことない、よ……(消え入る程度に)う、ううう嬉しかった……です」

瑠奈「(遥のセリフ後半にかぶせる)さあみんな、そろそろホームに行くわよ。集まって」

遥(M)「はあ……。私、駄目だなあ。こんなことじゃ、いつもと同じ……。ううん、駄目よ！そんなことじゃ駄目！諦めちゃ駄目なんだってば。そ、そうだ、目標を立てよう。うんと……何がいいかな……。よ、よしっ！今日は昨日よりもお話をしよう！明日は今日よりも……そ、そうしよう！」

僕「古乃宮さん、みんな行っちゃったよ？」
遥「えっ、あ、は、はいっ、ごめんなさい！」

□東京駅10番ホーム

しばらく時間が経過し、スーパービュー踊り子号が発車する。

発車案内女性の声「10番線、ドアが閉まります」
駅員男「10番線、ドア閉まります」

SE／スーパービュー踊り子号発車

□全

行ってしまった踊り子号を見送る陽菜。

陽菜「あくあ、行っちゃったあ……。それにしても、古乃宮先輩大丈夫かなあ。男の人が苦手って……。それどころの話じゃないよなあ、アレ。お兄ちゃんのかいでお兄ちゃんのお姉ちゃん、慣れてもらわなきゃって言ってたけど……。そう簡単に行くのかなあ。まあいいやつ！さあて、お土産買ってかーえろッ！（帰ろう）チーズケーキチーズケーキ……」



【エンディング】

□東京駅構内

売店でお土産を買う陽菜。

SE／東京駅構内

店員女「ありがとうございましたー」

陽菜「いっひっひ。お姉ちゃんには内緒だもんね。
お母さんと分けて食べちゃおう！」

SE／ぶつかる

陽菜・楓「あっ！」

陽菜「ごめんなさい、すみません！」

楓「いえ、こちらこそ……」

SE ~~雑踏が木まきなむ~~

M／エンディング

僕「友達同士数人での小旅行から始まった、

高二の夏……」

遥「この人に……」

陽菜「お兄ちゃんに……」

楓「あなたに……」

瑠奈「アンタに……」

僕「僕は自分の想いを精一杯伝えるだけ……」

了